

平成20年
10月30日

病害虫発生予報 11月号

茨城県病害虫防除所
茨城県植物防疫協会

全ての農作物に残留農薬基準が設定されています！！
薬剤散布の際は周辺作物へ飛散しないよう十分注意しましょう

< 目次 >

. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

イチゴ：アブラムシ類	1
ハクサイ：白斑病	1

【その他の病害虫】	2
イチゴ，促成ピーマン，抑制キュウリ，秋冬ハクサイ，冬レタス，秋冬ネギ 共通害虫	

. 病害虫ミニ情報

平成20年の水稲における主な病害虫の発生経過について	4
----------------------------	---

. 今月の気象予報	5
-----------	---

. テレホンサービス	5
------------	---

029(226)5321

農薬登録速報については，農林水産省ホームページ「農薬コーナー」
<http://www.maff.go.jp/nouyaku/> 内の登録速報を参照してください。

詳しくは，病害虫防除所へお問い合わせ下さい。

茨城県病害虫防除所 Tel :029-227-2445

予報内容は，ホームページでも詳しくご覧いただけます。

ホームページアドレス <http://www.pref.ibaraki.jp/nourin/byobo/>

・今月の予報
【注意すべき病害虫】

イチゴ

1. アブラムシ類
[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
	多い	県下全域

[予報の根拠]

10月下旬現在，平年より多い発生である。
気象予報によると，向こう1か月の気温は平年並と予想され，特に発生を助長する条件ではない。

[防除上注意すべき事項]

発生が多くなると防除が困難となるため，発生の少ないうちに防除する。
薬剤散布にあたっては，下葉を取り除き，葉裏や葉柄にもよく付着するよう十分な量で丁寧に散布する。また収穫前日数等にも十分注意する。
薬剤抵抗性アブラムシ類の出現を防ぐため，系統の異なる薬剤をローテーション散布する。

秋冬ハクサイ

1. 白斑病
[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
	多い	県下全域

[予報の根拠]

10月下旬現在，発病度，発生地点率ともに平年より高い。
気象予報によると，向こう1か月の降水量は平年並と予想され，特に発生を助長する条件ではない。

[防除上注意すべき事項]

今後の天候に注意を払い，降雨が続く場合には適宜防除を実施する。薬剤散布は，葉裏や株元にも薬液がかかるように丁寧に行う。
収穫間近の作型については，特に収穫前日数に注意して薬剤を選択する。
肥切れ，排水不良等は発生を助長するので，適切な肥培管理，排水対策等を行う。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予想	発生概況及び注意すべき事項
イチゴ	うどんこ病	発生量：平年並	10月下旬現在，平年並の発生である。ビニール被覆後は，ハウス内は発生を助長する条件となるので注意する。
	ハダニ類	発生量：平年並	10月下旬現在，平年並の発生である。ビニール被覆後は，ハウス内は発生を助長する条件となるので注意する。
促成ピーマン	ミナミキイロアザミウマ	発生量：やや多い	10月下旬現在，抑制栽培における発生は平年より多いため，促成ハウス内への飛び込みに注意する。
	タバココナジラミ	発生量：やや多い	10月下旬現在，抑制栽培における発生は過去3年中最も多いため，促成ハウス内への飛び込みに注意する。
抑制キュウリ	褐斑病	発生量：-	10月下旬現在，平年よりやや多い発生である。罹病部は次作の伝染源となるので，栽培終了時にはハウス外への持ち出し，処理を徹底する。 (農業総合センター平成20年度普及に移す成果参照)
秋冬ハクサイ	べと病	発生量：平年並	10月下旬現在，平年並の発生である。
	軟腐病	発生量：平年並	10月下旬現在，平年並の発生である。 風雨が多い日が続くと発生が助長されるので注意する。
冬レタス	斑点細菌病	発生量：多い	10月下旬現在，平年より多い発生である。被害葉はできるだけ，圃場外に持ち出し処分する。
	軟腐病	発生量：多い	10月下旬現在，平年より多い発生である。
	すそ枯病	発生量：やや多い	10月下旬現在，平年よりやや多い発生である。上位葉への進展はみられず，発生は，今後終息と思われる。
	腐敗病	発生量：平年並	10月下旬現在，平年並の発生である。

作物	病害虫名	発生予想	発生概況及び注意すべき事項
秋冬ネギ	黒斑病	発生量：やや多い	10月下旬現在，平年よりやや多い発生である。
	さび病	発生量：平年並	10月下旬現在，平年並の発生である。
共通害虫	ハスモンヨトウ	発生量：平年並	10月下旬現在，平年並の発生である。
	オオタバコガ	発生量：平年並	10月下旬現在，平年並の発生である。

平成 20 年の水稲における主な病害虫の発生経過について

本年の水稲における主な病害虫の発生経過については、下記のとおりでした。今後の防除対策の参考にしてください。

1．初期害虫

イネミズゾウムシ：成虫が山林の腐植層などで越冬し、田植え直後から水田に侵入する。本年は4月、5月の気温（特に最高気温）が低めに推移したため、成虫の活動開始が遅く、イネの初期生育が優ったため、食害程度は低くなった。

イネドロオイムシ：成虫が雑草地の枯草の下などで越冬する。この越冬成虫が田植え後のイネに産卵し、ふ化した幼虫の食害が大きい。昨年の多発生により越冬成虫が多かったため、本年は広い範囲で発生し、被害程度が高い水田も確認された。イネドロオイムシは、食害のピークが6月下旬になるため、育苗箱施薬で防除を行う場合には、効果が長続きする薬剤を選ぶ。

2．いもち病

葉いもち病は、例年6月下旬から発生し始め、7月下旬の梅雨明け直前頃に最も発生が多くなる。本年は、梅雨期間中の降水量が少なく推移した一方で、突発的な大雨があった。このため葉いもちの発生は当初少なく、後半になって平年並からやや多い発生量となった。しかし上位葉への進展は少なかった。

本年は出穂期以降降雨が少なかったため、穂いもちの発生は当初少なかった。しかし日照がやや少なかったことから、後半になって発生が増え、平年並の発生量になった。発生が遅かったため、被害の程度は低かった。

窒素過多はいもち病の発病を助長する。冬季に土壌診断を行い、適正な施肥量を把握しておくことが大切である。また、水田に放置された補植用置苗がいもち病の発生源となり、そこから圃場内へ広がっていくので、必要がなくなった苗は早めに処分する。

3．斑点米カメムシ類（クモヘリカメムシなど）

斑点米を発生させるカメムシ類は、イネの出穂前には水田周辺のイネ科雑草地に生息し、イネの出穂とともに水田に侵入する。本年は、出穂前の水田周辺イネ科雑草における発生量は平年並からやや少なかった。本田における発生時期は平年並で、全体的な発生量はやや少なかった。しかし地域や圃場により発生量の偏りがあり、多発生した圃場もみられた。

また、刈り取りが遅いイネでは、出穂時に飛来量が少なくても、周辺が刈り取りを終えるに従ってカメムシ類が順次集中し、斑点米被害が発生している場合もある。

斑点米被害を発生させるカメムシの種類は多いが、本県での優占種はクモヘリカメムシであり、県内ほぼ全域で確認されている。イネでカメムシ類に登録されている粒剤もあるが、クモヘリカメムシの防除効果は低い。クモヘリカメムシの防除は、乳剤・粉剤などを用いて、防除適期に行う。

4．縞葉枯病

ヒメトビウンカが媒介するウイルス病であり、昭和50年代に多発生していたが、近年はほとんど発生がみられなかった。本年、発病程度は低いものの、県西地域でイネの立毛中に縞葉枯病が確認された。本病は、発病株の収穫後のヒコバエ（再生稲）からウイルスを保毒したヒメトビウンカ幼虫が、越冬して翌年の伝染源となる。対策として、収穫後は早期に耕起してヒコバエを無くすことや、育苗箱施用殺虫剤によりイネ生育初期のヒメトビウンカを防除する。

・ 今月の気象予報

関東甲信地方 1 か月予報

(予報期間 10 月 25 日から 11 月 24 日)

気象庁 (10 月 24 日 発表)

< 向こう 1 か月の気温，降水量，日照時間の各階級の確率 (%) >

[確率]

要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	関東甲信全域	30	40	30
降水量	関東甲信全域	30	40	30
日照時間	関東甲信全域	30	40	30

[概要]

天気は数日の周期で変わるでしょう。平年と同様に晴れの日が多い見込みです。

< 1 週目の予報 > 10 月 25 日 (土曜日) から 10 月 31 日 (金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並の確率 50%

< 2 週目の予報 > 11 月 1 日 (土曜日) から 11 月 7 日 (金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並の確率 40%

< 3 週目から 4 週目の予報 > 11 月 8 日 (土曜日) から 11 月 21 日 (金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率 40%

・ テレホンサービス

下記の情報を 24 時間提供しています。リアルタイムな情報を提供するために，病害虫の発生状況等によっては内容を変更することがあります。

電話番号：029 (226) 5321

11 月上旬 イチゴ等，施設野菜の病害虫について

11 月下旬 ピーマン等，施設野菜の病害虫について

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬のラベルを必ず確認し，適用作物，使用方法，注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には，周辺作物に飛散（ドリフト）しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 使用後は散布器具やホース内等に薬液を残さず，良く洗浄しましょう。